

課題名 D. ソローのアンコモンスクール (Uncommon Schools) 論の現代的展開

研究代表者名	鷺谷 洋輔	(教育学講座)
研究組織等	澤田 哲生	(教育学講座)
	小倉 振一郎	(東北大学大学院農学研究科)
	高倉 浩樹	(東北大学東北アジア研究センター)
	内田 典子	(東北大学災害科学国際研究所)

研究の目的と方法

大学における教養科目の位置づけが揺らぐ今日、19世紀のアメリカに生きた作家 D. ソローの視点は興味深い。教育思想家としても知られるソローは、学ぶという営みが制度化された教育 common schools によって限定されていることを危惧していた。対してソローが提起したアンコモンスクール uncommon schools の発想は、「自然観察」や「博物学」のような主流から外れた学びを重視するものであった。制度外の教育を提起するというよりも、学びのありかたそのもののオルタナティブを模索する姿勢がそこに看取できる。今日の大学教育に求められるのも、このような発想と試みではないだろうか。

以上をふまえ、本プロジェクトは①ソローの思想とアンコモンスクール論を改めて整理し、その現代的な意義や可能性を検証すること、②参加・実践型のワークショップを企画、実施することの二つを課題とする。地域の専門家を交えるほか、主に教育学部の学生を参加者とし、来年度以降の展開を目指すパイロットプログラムとなる試みである。

研究の経過

①について、ソローの一連の著作、及びアンコモンスクールに関する論考を整理検討した。「アンコモンスクール」だけでなく、「野生」や「自由」といったソローが強調する語には、学校空間からはみ出ていくソローの発想が伺えるが、その手立ての一つとして位置付けられるのが、ソローの言う「歩く」ことである。このことを踏まえながら、現代のわれわれが生きる文脈で、「歩く」ということから「教育」や「学び」はどのようにとらえ直すことができるか、その具体的実践はいかに進められるかを大きな問いとした。さらに、具体的な実践へと接続するために、アープスクールジャパンの運営に携わった千松信也氏を招きディスカッションを行った。これらを踏まえ、感性を研ぎ澄ますような野外での活動を提案すること、とりわけ「歩く」ことにフォーカスした取り組みを企画・運営することを具体的な課題とした。

②を行うに先立ち、本学の川渡フィールドセンター主催で 10 月に開催された農工連携ゼミに参加した。ここでは現状の大学主催のフィールドワーク型実践が目指しているポイ

ントや運用面での特徴と課題を把握することを目指した。以上をもとに、同センターにて「歩く」ワークショップを企画した。「歩く」ことの（学術的）可能性を探る試みであり、学ぶべきコンテンツを予め設定する一般的な教育プログラムとは一線を画すものである。

研究の内容と成果

川渡フィールドセンターの敷地内にて、2026年2月26日-27日の午後と早朝の二度にわたって〈歩く実践〉を行った。参加者は本学の教員3名（教育学部2名、農学部1名）、助教1名（東北アジア研究センター）、大学院生1名（文学研究科）、学部生4名（農学部3名、教育学部1名）で、二つのセッションのあいだにディスカッションを挟んだ。以下はディスカッションとレポートをまとめたものである。この取り組みを通じ、それぞれが交錯する大きく三つの論点が浮上した。

①ただ歩く、オープンエンド性

目的（地）がないことで、かえって目的や見出すものへの注意や気配りが高まったというのが多くの見解だった。周囲との会話や足元の感触、歩く速度やリズムのような、普段考えないことがらに思考が向くことになったと指摘された。

②他者と歩く



他者が気づくことや驚くことを共有することで、一人で歩くときにはない視点や感覚が浮かび上がった。こういった自分の感性には働きかけなかったものについての気づきは、普段得難いものだという指摘もあった。一方で、ひとりで歩く方がより感覚が研ぎ澄まされることも挙げられた。

③身体感覚



普段と異なる風景、空間、地面を歩くことで、日常生活が変化の乏しい道やアスファルトでなされることが逆照射されるという視点が挙げられた。馴染みのある空間や進行方向ではないところに踏み込むときの没我感は、言語的な説明がしがたい身体感覚と近いのではないかという考察や、感覚によって引き起こされる身体的な記憶が挙げられた。

まとめと今後の課題

本プロジェクトは、〈普段と異なる空間を、他者と、目的に縛られることなく歩いてみるという実践〉が、「感性を共有し、思考を広げていく可能性を示したこと」にポイントがある。それは、「歩く」ことから「教育」や「学び」を再考し、具体的に提起していくための指針となるものだ。今後の課題は、ソローの思想を現代の状況に接続しながら、アンコモンスクールの実践の意義をより精査すること、今回とは異なるワークショップを重ねることで、こういった試みの成果をより踏み込んだ形で提起することである。